



イメージ図

前年の大運動会の収支報告によると賞品費が予算の3分の1強、現在の金額にして50万円以上を占めていたこと、市内の商店などから寄付を集めていたことを考えると、この余興の賞品も学徒にとっては、なかなかの高級品であったと思われる。実際、この旨い話に目の眩んだ参加者は、竿に群がり、いち早く賞品を手に入れようと我さきにと登り始めたようだ。

しかしながら、そこは余興。威勢よく登っていった者たちは、なぜかあと一歩のところで手が届かず、竿をすべり落ちてしまう。実は、竿の先には、ぬるぬるとした豚の脂が塗られており、多くの参加者はこの仕掛けにとらわれ、豪華賞品を目前に脱落を余儀なくされたようである。

当時まだ珍しかった大運動会には、市内外から近所の子供達を含む多くの見学者が詰めかけていたようだが、滑る竿に懸命にしがみつく姿に場内は盛り上がり、ついに賞品を手に入れた者は、大きな喝采を浴びたようである。新緑の岡山城下で汗する学徒達の姿を見ることは、見学者達にとっても、戦争により重苦しくなっていたであろう時代の空気を忘れられる、ひとときの休息となったのではなかろうか。

競技順序67番 4年級余興「発火演習」

ときは明治37(1904)年5月。2月に始まった日露戦争のさなか。富国強兵策のもと10年前の日清戦争で台湾、遼東半島などを奪い、さらに当時の国家予算の2倍強もの戦時賠償金を日本は清国から手にしていた。その勢いのままさらに朝鮮半島、満州の利権をロシアと争うこの攻防の重要地点が遼東半島先端の旅順要塞であった。『烏城』39号によれば、そこを陸軍と海軍陸戦隊に扮した4年級が攻略するという筋書きの余興であったらしい。運動会の開会・閉会は大砲の発砲(空砲)で告げられ、競技は小銃の発砲(空砲)でスタートしていた。時代に相応した余興であったようだ。



明治33年(1900)の発火演習の記念写真

激しい戦闘の後、死傷者多数ながら勝利し、死傷者、兵器が散乱する惨状の中で観兵式を行ったという見立てで余興は終わり、運動場を1周して引き上げた。海軍陸戦隊に模してお濠に端艇(ボート)も浮かべたようだ。実際の戦闘はこの余興の7か月後まで続き、双方で3万人以上の人命が失われたとある。

戦争で他国の領土と賠償金を奪うことが「正義」であった時代、岡中生の多くもそれを疑うことはなかったかもしれない。それから40年戦争に明け暮れ、甚大な加害と被害の傷跡を歴史に刻むことになる。運動会は平和と友好の祭りであってほしい。

番外編 提灯行列

午後6時から、運動会の準備と運営に尽力した5年級の生徒と教員との慰労会が講堂で、立食パーティー形式で開かれたが、慰労会後の様子が『烏城』39号に次のように書かれている。

『会終えて本校先生の提灯行列を催しぬ 楽隊を先に立てて無数の提灯は軍歌の声勇ましく相生橋を渡って小橋町に出で 本通りを経てステーションに至り 君が代を高唱して別れぬ』

夜の8時から9時頃、わざわざ相生橋を渡り、かなりの遠回りをしながら、楽隊を先頭にズンチャカズンチャカと駅まで提灯行列とは! 当時、先生と5年級の生徒で100人近くはいたのではないだろうか。この頃、岡中の運動会がある意味「祭事」であり、現代のスポーツ観戦的要素もあり、市民もきっと大目にみていたのだろう。

